



たつこの共同保育所 30年記念誌  
過去・現在・未来



たつのこ共同保育所

30年記念誌

過去・現在・未来





## はじめに



二〇〇七年、たつのご共同保育所は30周年を迎えました。これを記念して30周年記念誌を発刊することになりました。多くのOB、在園児の父兄の方々から、たつのごへの思いを綴っていただき、たつのごの歴史をひも解くような、OBの方には懐かしい、在園の方には驚きや感動のある、すばらしい記念誌になりました。思えば、我が家がたつのごにお世話になって6年が経ちます。初めてたつのごに足を踏み入れた時、どこか懐かしい感じがしました。この感覚はたつのごを訪れる大人達、共通の感想のようです。今では失われつつある雰囲気はここにはあります。子供たちを温かい目で見守ってくれる保育者。赤ちゃんから6歳児まで、みんな兄弟のような縦割り保育。そして、何かと協力して下さるOBの方々。これからもこの場所がみんなの集まれる場所であり続けるよう、子供たちと共に明るく楽しくやっていきたいと思えます。

このたつのごのすばらしさを、少しでも多くの人達に感じてもらいたいと思い、「たつのごであそぼ。」という企画を立ち上げ、3年目に突入しました。来て頂いた方々にも好評で、参加した方の中からたつのごに入園された人もいます。これからもたつのごの良さを感じてもらえるよう、いろいろな手法で発信していきたいと思えます。

そして、この記念誌が、たつのごに興味を持って頂いた方々のお役にたてればと思っています。

應家 晶

はじめに……………	3
子どもを預けるところ……………	5
たつのこができたのは……………	6
たつのこの一年……………	10
たつのこの30年……………	12
たつのこの現役から……………	24
たつのこのOBから……………	42
たつのこのつながり……………	68



## 子どもを 預けるところ



共同保育所の特徴は、親と保育者が共同経営者であること。

共同経営者だから、行事の関わりも深いし、

最高決定機関である運営会を

月に一度は開き、みんなで問題を話し合って決めていきます。

運営会は大事な交流の場で、こどもたちの日ごろの様子を、

悪いところもふくめてオープンに話し、

同じ道を通ってきた親がアドバイスをしたりします。

自治体の助成金は受けていますが、財政難はずっとある課題なので、

運営資金の確保のための話し合いは重要です。

でも、基本は親も子どもも明るく楽しみながら

育児を通して成長することなので

こんな風でできたら…ということを話し合っています。

その時代にあったやり方で大人たちが子どもの事を考え、

居心地のいい大きな家族のように

参加するひとりひとりが創る保育所です。

たつのこができたのは…

たつのこ共同保育所が創立したのは一九七七年。


この保育所をつくる発端となったのは、一九七〇年代初期に、川崎の高津区で女性たちが集まってやっていた「婦人問題を考える会」という小さな学習会でした。この学習会は、女性解放を主なテーマにして話し合いや学習をしていました。

そのうち、メンバーの半数以上が子持ちになり、「婦人労働と子育て」「男と女の関係のあり方」の問題は絶えずグループの中心課題となり、母子で閉鎖的な家の中で向き合っている主婦の悩みや、子育てと労働とどちらにも主体的になり切れない女子労働者のかかえている問題が次々と話されました。

そうした状況をそのままにしたくない、なんとかして

「もっと人間らしく、生き生きと生きたい」

「もっと子ども自分もいろんな人々と接したい」

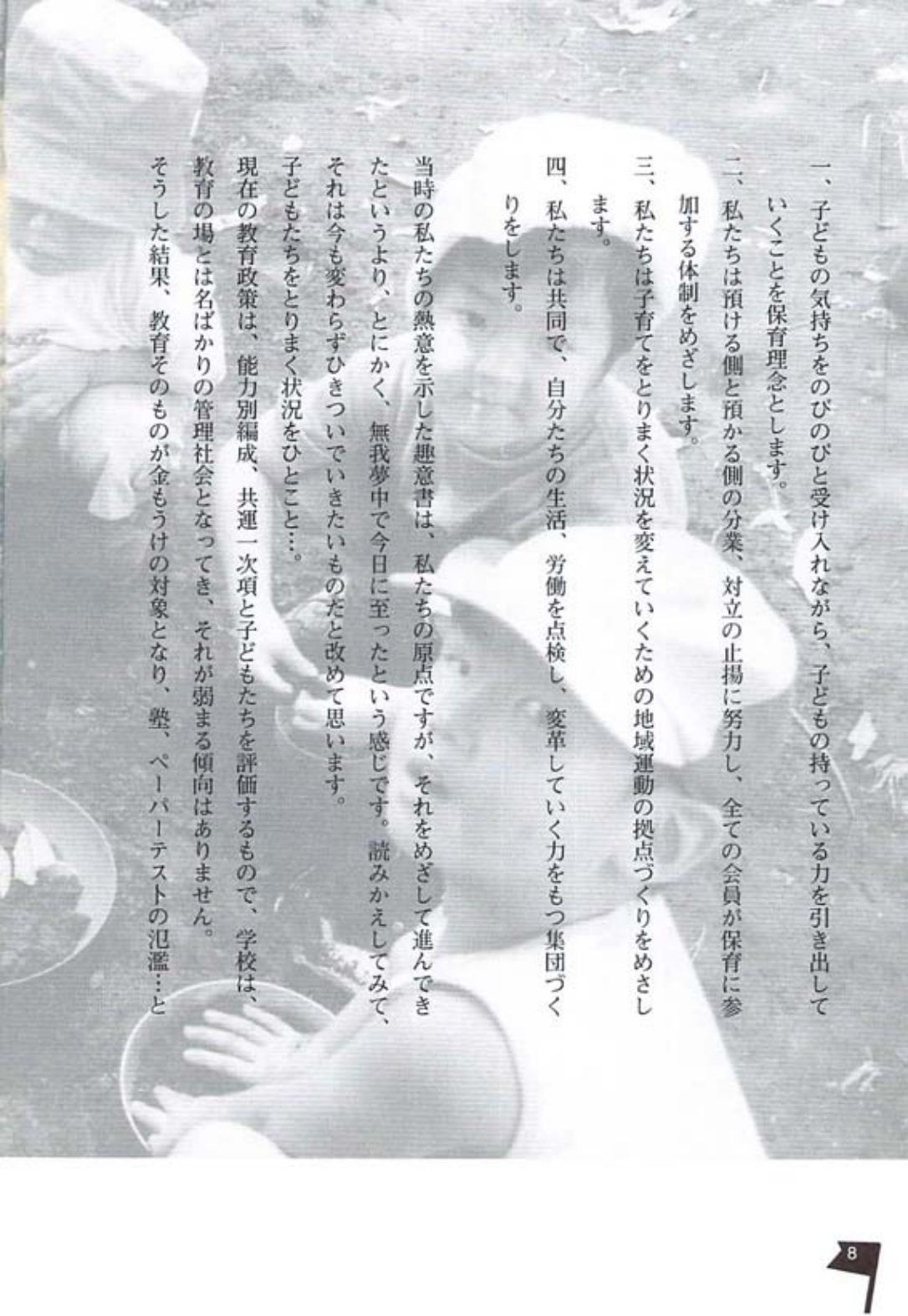


「子育てというあたり前の行為を自分の手にとりもどきたい」という声はだんだん切迫したものになってきました。

その声は、すべてを金や物に換算し、議争や序列で人間の価値を決定していく社会への批判や、バラバラにされた人間関係、子育てのあり方をなんとかしなくては、という思いでもありました。

そして、単に批判するだけでなく、自分たちが主人公になって、自分たちの力で人々や周囲に働きかけ、つくりかえていきたいという強い欲求になりました。そうした思いを学習会でみんなで出し合いながら、保育論の学習もし、共通の理解をだんだん深め、保育所づくりに踏みきりました。

たつのこ共同保育所を建設する時に、まわりの人々に協力を求めて出した趣意書には、こう書いてあります。



一、子どもの気持ちをのびのびと受け入れながら、子どもの持っている力を引き出していくことを保育理念とします。

二、私たちは預ける側と預かる側の分業、対立の止揚に努力し、全ての会員が保育に参加する体制をめざします。

三、私たちは子育てをとりまく状況を変えていくための地域運動の拠点づくりをめざします。


四、私たちは共同で、自分たちの生活、労働を点検し、変革していく力をもつ集団づくりをします。

当時の私たちの熱意を示した趣意書は、私たちの原点ですが、それをめざして進んできたというより、とにかく、無我夢中で今日に至ったという感じです。読みかえてみて、それは今も変わらずひきついでいきたいものだと改めて思います。

子どもたちをとりまく状況をひとこと…。

現在の教育政策は、能力別編成、共運一次項と子どもたちを評価するもので、学校は、教育の場とは名ばかりの管理社会となつてき、それが弱まる傾向はありません。

そうした結果、教育そのものが金もうけの対象となり、塾、ペーパーテストの氾濫…と



教育産業が盛んになり、親も子も巻き込んで、成績一有名校一大企業へとかりたて、あらゆることか、それが幸せな結婚の条件とさえいわれる有様となりました。

そして幼児に対しても、「早期教育」「能力開発」が叫ばれ、おそろしい程の勢いでその影響が出てきました。特に、幼稚園や保育園の多くで、子どもをいかに発達させるかが視点となり、また、小学校へ入学した時困らないようにと、早くから能力開発用のオモチャを与えたり、文字、数字、ハーモニカ、水泳などを教えこみ、それを経営の目玉として親たちを誘いこんでいます。

実際に親たちもせき立てられるように子どもたちを知育偏重に追い立てているといえます。本来、この世に生をうけて間もない乳幼児は、人に愛され、仲間と思いきり遊び、生活するなかで、体や心をつくりひとりの子どもとして成長していきます。

しかし、知育偏重の、発達をものさしとする子育てでは、子どもたちから友だちとの共同体験やエネルギーを奪い、子どもたちをバラバラにし、共に生きようとする力や志向よりも、お互いを差別しあうような心だけをつくり出していくのではないかと思います。私たちは、そうした社会全体の流れに怒りを感じるとともに、絶対に許しがたいものである、と思います。

一  
年  
の  
こ  
の



ゆすら梅を収穫。ジャム  
にしておやつにもするよ



5  
月

春  
バ  
ザ  
ー



ゆすら梅の花

8  
月

納  
涼  
会  
・  
大  
掃  
除  
  
キ  
ャ  
ン  
プ



たつのこの庭の  
みかんの花



暑いときにはプールが一番。  
小さい子はバケツプール。

バザーは大切な資金源とともに  
コミュニケーションの場。



桜の花見の頃は津田山霊園、森  
林公園などにお出かけ

最近は大六天バンガローに  
行っています。





## 1977年(昭和52年)

- ・4月に溝の口と梶が谷の中間地点の大山が移動のそば、山口ハイツの2DKでたつこの共同保育所スタート。(子供4人、保育者2人と親1人)

## 1978年(昭和53年)

- ・お昼寝あともお散歩。梶が谷駅のすぐ下を通る電車を金網にへばりついて電車を見ていた。
- ・9月、久保台の一戸建てへ移転。

## 1979年(昭和54年)

- ・この頃、バザー収益は12万5千円くらい。
- ・九州の柳下村塾という共同保育所へ保育者1人、母1人。子供4人で一週間の武者修行に行く。
- ・初めての対市交渉



話の大きな柱は「保育所の運営について」だった。田園都市線の梶が谷駅近くにそこそこの庭つきの一軒家を借りるのに相当の金が必要だったし、何より保育専従者の給料の支払いが大変だった。どこからカネを集めてくるか？バザーを開いた。知合いや近所をまきこんで、チラシをまき、品を集め、値段付けをし、食べ物を仕込んで、駅前の空き地で催すバザーはお祭り騒ぎだった。パンフレットを作って有料で売った。いくらかの収益と、それ以上に嬉しいものとして、関心を寄せて訪れてくれる人が増えた。(ちなみに訪問者は多く、三里塚で知りあったカナダの青年がギターをもってよく遊びに来たし、三人の子供をつれて駆け込んできた友だちもいた)

無認可保育所に補助金をよこせと市役所と交渉した。オムツをたて子供を連れて川崎駅から市役所までデモをする。保育課長と交渉を重ね、三日間横断幕をにかけて川崎駅前に座り込み、テレビ局の取材も受けた。

保育をしながら女一人で子供を育てる決意をした仲間が複数いて、彼女たちの生活を保障する給料はどうしても必要だった。私たちが話合いの結果採ったルールは、ごく単純なものだった。保育料は一人につきいくらかときめた定額を払う。子連れ専従保育者も同額支払った。二人目からは割引をする。生活に余裕のあるものはカンパをする。保育専従者に払う金額も一定だった。生活維持ギリギリの保育専従者の給料は話し合うたびに問題になったが、住宅維持費や保育料支払額を考慮したくらいで変らなかつたと思う。私たちは子供を預けたいという人は誰でも歓迎したが、同じルールで対応した。(本文抜粋)



わたしたちの共同体  
70年代ウーマンリブを再読する  
(社会評論社)  
著・西村 光子



## 1980年 (昭和55年)

- ・隣家が2階増築で日当たりが悪くなり、体調の悪い子には厳しい冬を過ごす。
- ・市に交渉して強化ガラス、ストーブなどの成果があった。

## 1981年 (昭和56年)

- ・チャボを飼い始める。川崎駅前で24時間の抗議の座り込みをする。
- ・この頃のパザー会場は梶が谷駅前広場。土地、売家、貸家探しをする。

## 1982年 (昭和57年)

- ・給食メニューベスト3は、「おからハンバーグ、ポークビーンズ、かぼちゃカレー」  
主菜は玄米。食材に散歩の途中で摘んで来たのびる、つくし、よもぎ、タンポポ、柿の葉、ふきのとう、どくだみなども食卓にのぼる。
- ・毎朝マラソン

## 1983年 (昭和58年)

- ・明治大学の人形劇サークル「からっこ」のお兄さん、お姉さんが訪問。出し物は「おこん浄瑠璃」と「3匹のこぶた」
- ・初めての保母旅行で、三浦半島へ一泊旅行。  
民宿のおいしい料理と夜の散歩。
- ・秋バザー収益は26万円くらい。

当時は犬を飼っていて、活気ある朝の様子や保育内容なども書かれています。



## 1984年 (昭和59年)

- ・秋バザー収益は40万円くらい。
- ・2年がかりで「たつのこ通信」完成！

## 1986年 (昭和61年)

- ・保育参加月1回位の割合で親が一日保育に入り、保育者が有給休暇を取る。  
順番に親も調整するのが大変だった。

## 1987年 (昭和62年)

- ・いのまた美恵さん選挙に。
- ・キャンプは丹波の休暇村へ一泊。

## 1988年 (昭和63年)

- ・4月に梶が谷から宮崎台駅より徒歩10分のところへ移転。
- ・市へ助成金アップの要望書を提出 (子ども21人、保育者7人)
- ・たつのこ運営会会則作成





## 1989年(平成元年)

- ・6年ぶりに対市交渉。保育課長など3人来所。助成金アップの要望書提出。

## 1991年(平成3年)

- ・身近なあそび場は、宮崎第3公園や第4公園。まだまだ桃畑(宮崎は桃の花の産地だった)広がってその中も散歩コースのひとつだった。宮崎台の駅も近くて電車はよく利用。雨の日は、中央林間まで行って、フライドポテトを食べて帰って来るなどということもあった。

## 1992年(平成4年)

- ・宮崎3丁目のたつのこの庭は広くてすすきの「くさむら」もあった。端の「畑」で小玉西瓜を作ったこともある。今、赤ちゃん部屋になっているブレハブは庭先にバザーの品物倉庫として設置していた。庭の柿もバザーで売ったりしていた。
- ・しかしそこも、ずっと居られるわけではなく、新しい移転先を探すのに少々あせっていた。散歩途中で、ゆすら梅を勝手にご馳走になっていた空き家が現在のたつのこ、たまたま保育者の中学生の同級生の家だった。秋から契約を結び、リフォームを始める。

## 1993年(平成5年)

- ・費用を現役、OB、OGのカンパで集め、2月末現在地へ引っ越し。庭つき戸建てはもう無理かなと思っていたのだが…本当に運がいいというか歩き回るものかどうか、大家さんに感謝というか…。駅から離れ、電車通いの家庭はちょっとたいへんになった。
- ・バザー会場として最高だった溝の口の空き地は駅周辺再開発のため使用できなくなり(現在石原文具の入ってビル周辺)この年の春バザーが最後になる。
- ・子犬から拾って12年の付き合いのコロ永眠。
- ・夏のキャンプ数年ぶりに再開(西丹沢は大滝キャンプ場)。

## 1994年(平成6年)

- ・2月の弁当日は向ヶ丘遊園でアイススケート。だいたい毎冬行っていた。
- ・散歩コースは上作延方面に広がり、弁当もって森林公園やら霊園にもよく行くようになった。
- ・春バザーは市民プラザ、秋バザーは不動が丘公園、その他、高山団地や横浜の反町公園の催しにも出店する。



## 1995年(平成7年)

- ・春バザーは新城公園で。その後バザー会場はほとんどそこに定着。秋バザーでは散歩で拾ったマテバシイのクッキーも販売した。
- ・「子連れ保育」をめぐる問題をきっかけとして保育者間の信頼関係の希薄さが露呈し「分裂状態」となって親の信頼も失うという状況に。何度は全体で話し合いをもつ。

## 1996年(平成8年)

- ・大幅な保育者の入れ替えで保育体制の立直しの年となる。
- ・「やまぶき」の人たちと森林公園で交流したり、溝の口の市立美護学校のプールを借りて遊んだり。
- ・弁当日は四季の森公園や町田リス園、寺家ふるさと村、夢見ヶ崎動物公園などに行った。

## 1997年(平成9年)

- ・宮前区役所ロビーでのアルペンホルンのコンサートでは「英語の人」に抱っこされて踊って固まる子ども。
- ・農協の畜産祭りでは牛や豚のど迫力にびっくり。
- ・上作延保育園に来た移動動物園も見に行く。
- ・秋にはファミリーマートの下の小さな公園でたつこミニ運動会。

## 1998年(平成10年)

- ・溝の口パークシティの集会所での毎週の「わらべ歌」教室は、上作延集会所を借りてするようになった。
- ・夏の始めには溶連菌感染症流行。
- ・代々木公園のフリーマーケットにも逸路はるばる参加。
- ・夏のキャンプ(大滝キャンプ場)は霧雨っぱい、少々肌寒い日となった。

## 1999年(平成11年)

- ・このころはまだ梶ヶ谷駅から谷向こうに見える丘はまだ身近な里山として残っていて弁当持ちの散歩コースのひとつだった。「ターザンの木」で遊んだり、竹の子掘ったりした。
- ・春バザーは高津郵便局向かいの公園で開催してみるが売り上げがもうひとつ。
- ・大田区の馬込共同保育所へ大きい子たち遊びに行く。
- ・橘プラザの子育てを考える集いに、保育者、助言者として参加。
- ・弁当日は野毛山公園や世田谷公園にも行ってみる。

わかれかい



## 2000年（平成12年）

- ・4月、宮崎台駅周辺でのさくら祭りにミニバザー出店。
- ・夏キャンプはこの年から、大六天キャンプ場に。

## 2001年（平成13年）

- ・お別れ会はこの年から4回宮崎台、公務員宿舍集会場を借りて開催。
- ・橋プラザでの親子の集いに保育者助言者として参加。
- ・たつご財政を救うためにTVクイズ番組に応募。「1000万円賞金」へ向けてオーディション通過で頭金取得かと浮かれるが、本戦への第2次オーディションで敗退。でも、楽しかった。



## 2002年（平成14年）

- ・8月、生活ホームと合同で多摩川バーベキューに参加。
- ・お弁当日は等覚院、多摩川、飯山観音などに行く。
- ・夏には学生のお姉さんボランティアの参加があり、子どもたちは大喜び。

## 2003年（平成15年）

- ・夢パークへ10月全員で行く。
- ・11月、3月に紙芝居の小林ひろみさんが上演。




 たつのこ探検マップ  
 2000年3月



## 2004年(平成16年)

- ・恒例の高津養護学校での人形劇。
- ・子どもの健康診断始める。
- ・お弁当日は渋谷児童会館、つくし野アスレチックなど。
- ・ずっと参加していたミニバザーが当日になって、出店許可がなかったと中止になり、園児募集を兼ねて地域の人たちとの交流できることは何かを話し合う。

## 2005年(平成17年)

- ・感染症についての臨時運営会。
- ・6月、地域交流 たつのこであそぼ 第1弾「かざぐるまをつくろう」開催。「紙芝居、わらべうた、白玉団子作り」など回を重ねる。
- ・エプロンシアターの飯田さんによる「食育について」
- ・「おはなしの樹」の読み聞かせも上演
- ・移転話が持ちかけられ、全員総出で不動産屋巡り、自治会へお願い、空き家情報などを求めて物件探しをするが、まったくなく途方に暮れる。

## 2006年(平成18年)

- ・物件探しも引き続き行いが、大家さんが地域との関わりを直接見てくださる機会があってからいい方向に向かい継続して借りることができることになる。
- ・30年記念OB会が開かれ、創設メンバー、OB、現役の交流が実現。当時は振り返り話しは尽きない時間が持てました。
- ・耐震診断結果のあと、リフォームか？まだまだ課題は多い。
- ・地域交流 たつのこであそぼ「まきまきパンとわらべうた」など。参加者から入所される人もでてきて、少しずつ。
- ・栗飯原良造先生を囲んでお話し開催。ひとり語りと遊びのワーク(座間さん)みんな語りにも引き込まれました。
- ・思いのほか少人数のキャンプだったが、大六天キャンプ場初のドラム缶風呂で身も心も温まる。
- ・「ちいさい、おおきい、よわい、つよい」(ジャパンマシニスト社)に「こどもを大切に作る保育園特集」で掲載される



「がんばってるね、お母さん」  
(ラトルズ)  
共著・栗飯原良造・森 昭子



「ちいさい、おおきい、  
よわい、つよい」No.54  
(ジャパンマシニスト社)

